

【プレスリリース】

国文学研究資料館が武者小路実篤記念館所蔵  
「武者小路実篤自筆資料」のデジタル画像、第Ⅰ期公開  
明治～昭和期の小説・詩・随筆草稿など、近代文学史の根幹資料

2024/5/1

国文学研究資料館（以下「国文研」）は、調布市武者小路実篤記念館（東京都調布市）が所蔵する武者小路実篤自筆資料 177 点（計 3,838 枚）の高精細デジタル化に取り組み、2024 年 5 月 1 日に国文研の「国書データベース」（※）にて公開しました。今回の撮影公開は第Ⅰ期であり、今年度も連携を継続する予定です。近代日本の代表的作家であり大きな影響を与えた武者小路実篤の自筆資料群は作家の実像を鮮明に浮かびあがらせるだけでなく、文学史・美術史・社会史・思想史について知る上で重要な情報を多く含んでいます。

武者小路実篤（1885～1976）は東京府麹町区（今の東京都千代田区）に生まれました。学習院に初等学科から高等学科まで通い、東京帝国大学に進学、中退後に、学習院で出会い終生の友となった志賀直哉や有島武郎らとともに雑誌「白樺」を創刊します。個性と自我を肯定し、自らの考えを口語体で率直に表現する実篤の文体は、小説『お目出たき人』（1911）、戯曲『わしも知らない』（1914）などの数々の作品によって明治末から大正の文壇に衝撃を与えました。ロシアの文豪・トルストイへの傾倒でも知られ、その影響を受けて誰もが平等で人間らしく生きられる社会の実現を志し、宮崎県木城に共同体「新しき村」を創設しました。執筆と実践により世に問うた実篤の思想は、文学のみならず美術、演劇、思想ほか文化の広い領域にわたって、近代日本に大きな影響を与えつづけています。

武者小路実篤没後、遺品が調布市に寄贈され、昭和 60 年に武者小路実篤記念館が開館しました。同館所蔵の自筆資料は小説や詩、エッセイの草稿のほか、書簡やノートなど多彩です。今回公開する画像は、国文学研究資料館の「国書データベース」から閲覧できるだけでなく、今後リンク作業を経て武者小路実篤記念館の「収蔵品データベース」からもご覧いただけるようになります。2023 年より同館と国文学研究資料館との協力・連携のもと進めたデジタル化の取り組みにより、実篤の自筆資料のインターネットを通じた検索・閲覧が「いつでも、どこでも、どなたでも、そして無料で」可能になりました。

（※「国書データベース」は 2024 年度より、当館の旧「近代書誌・近代画像データベース」のデータを統合しております）

## ■ デジタル公開の意義

高精細画像によって公開される草稿からは、推敲などから実篤の思考の跡をたどり、また表現への模索を見ることができます。

今回公開される自筆資料は、雑誌「白樺」創刊前後の習作稿から 1970 年代におよぶもので、戯曲『或る青年の夢』（1916）や小説『病氣』（1909）、『愚者の夢』（1946）など創作の草稿を含むほか、『武者小路実篤全集』18 巻（1991、小学館）の作品発表年譜に記載のない作品草稿も含まれています。実篤の草稿は長いキャリアのなかで書き方が少しずつ変化していますが、今回の画像公開によって、それぞれの時期の執筆を見くらべることもできるようになりました。新しき村在住期の大正 12 年と 13 年に書かれた「気まぐれ日記」原本では、他人が読むことを前提としない日記の自由な書き振りから、実篤の思考や感情が生のまま伝わり、その後公刊を決めると人名のイニシャル化や削除の指示が書き込まれ、そこに実篤の倫理観や道徳観、価値判断などを読み取ることができます。またドイツ語で書かれたトルストイ伝を筆写したノートは、余白に解釈や感想が書き込まれ、明快な文章表現によりともすれば単純素朴と見られがちな後年のイメージとはおよそ異なる、緻密で理知的な学習者としての実篤の姿を教えてくれるものです。

小説・詩・戯曲の各ジャンルにわたる作品群は、作家の私生活から、大正の文学や美術を牽引した「白樺」、社会運動としての「新しき村」、思想・宗教、時代や社会の変化まで、幅広い内容を持っており、文学や人間関係の広がりを探索することも可能です。

中学校や高校、大学の教室でも、実篤の草稿をスマートフォンや PC の画面で読み、作家の苦闘に触れることができます。自筆草稿を誰もが閲覧できるようになったことで、実篤の実像をより正確に知ることができるようになり、文学の研究・教育はもちろん、さまざまな分野における探究の可能性が広がると考えます。

なお今回の画像公開は、国文研の事業「近代文献草稿・原稿類に関する所在目録調査と研究」の一環であり、すでに公開された「島尾敏雄特別資料」（かごしま近代文学館蔵）・「森田思軒自筆原稿資料」（笠岡市教育委員会管理）・「中原中也自筆資料」（中原中也記念館蔵）とともに、近代の「自筆資料」の具体的な姿を知ることができます。

〈本件に関するお問い合わせ〉

・ 国文学研究資料館 管理部学術情報課 社会連携係

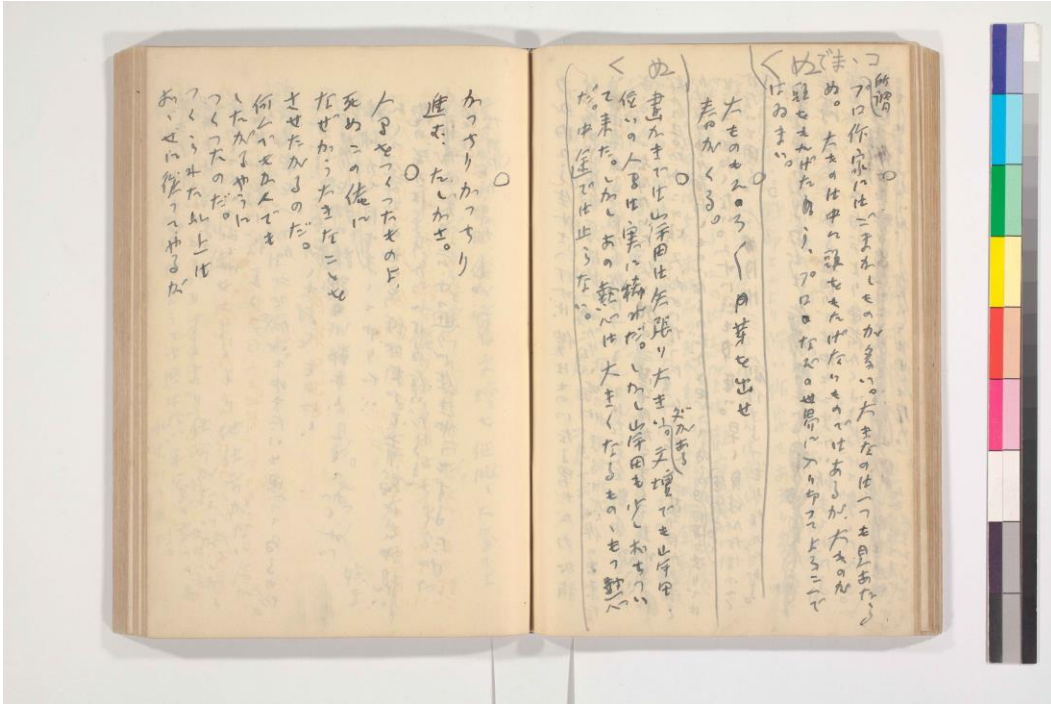
E-mail: jigyou@nijl.ac.jp / TEL: 050-5533-2910 / FAX: 042-526-8607

・ 武者小路実篤記念館

E-mail: kinenkan@mushakoji.org / TEL: 03-3326-0648 / FAX: 03-3326-1330

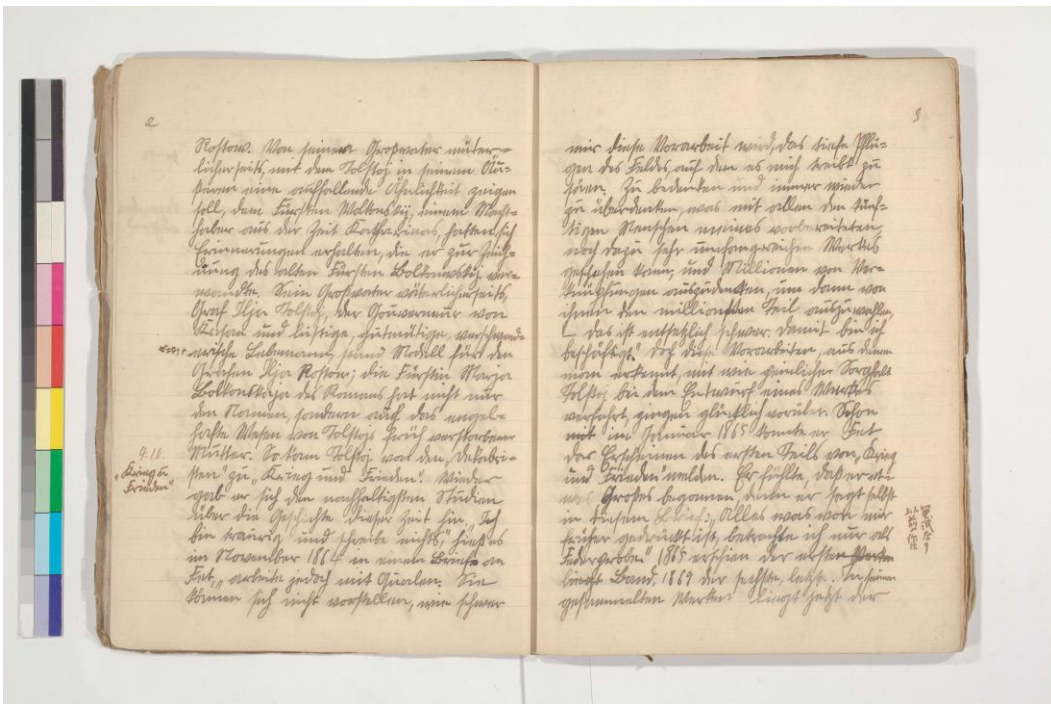
■「国書データベース」で公開される武者小路実篤自筆資料の例

1) 「気まぐれ日記」



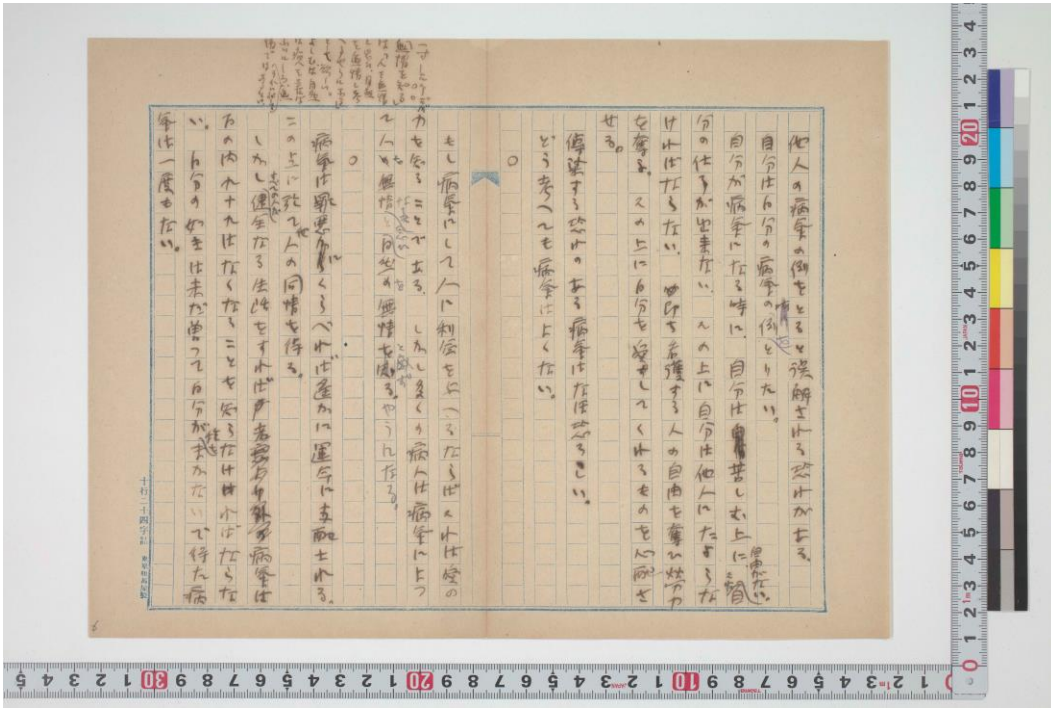
ペンで書いた日記に、公刊にあたって鉛筆で「ココまでぬく」と削除指示が書き込まれている。  
(MSMM-00160-00191)

2) 「トルストイ伝筆写ノート」



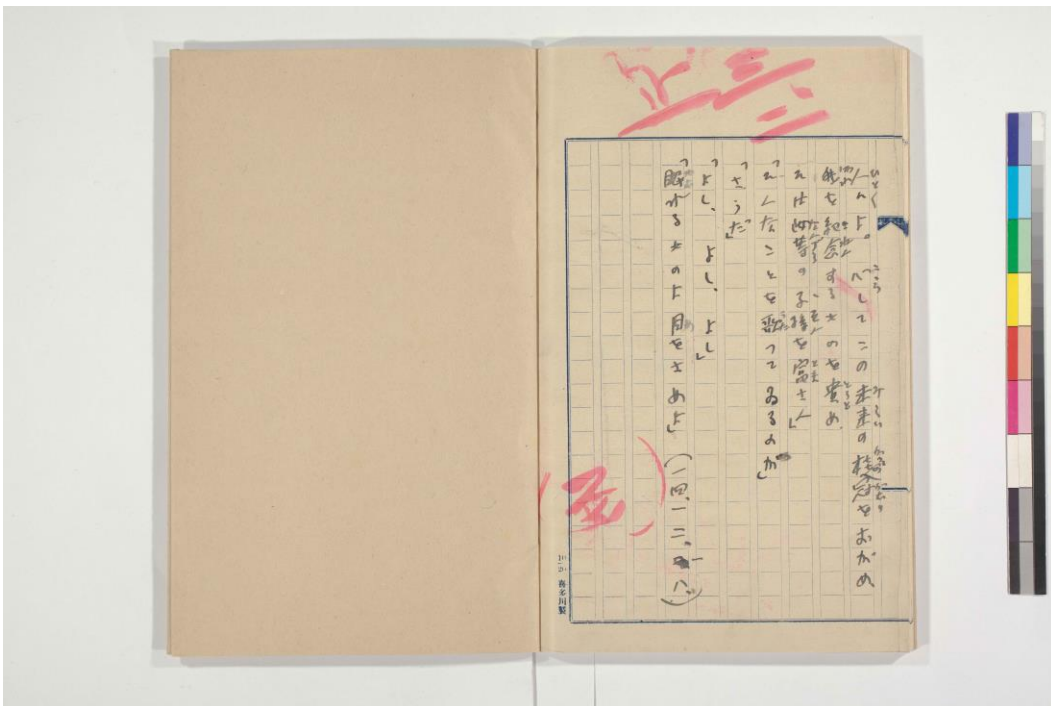
学習院高等学科 3 年時に、ドイツ語の「トルストイ伝」を筆写したもの。流麗な筆記体で書かれている。余白に書き込みがある。(MSMM-0175-00005)

### 3) 「病氣」



『白樺』創刊前の回覧同人誌「望野」時代の原稿。3枚目欄外に志賀直哉の書込みがあり、同人間で批評も書き込んで回覧したことがわかる。(MSMM-0055-00003)

### 4) 「未来の桂の冠」

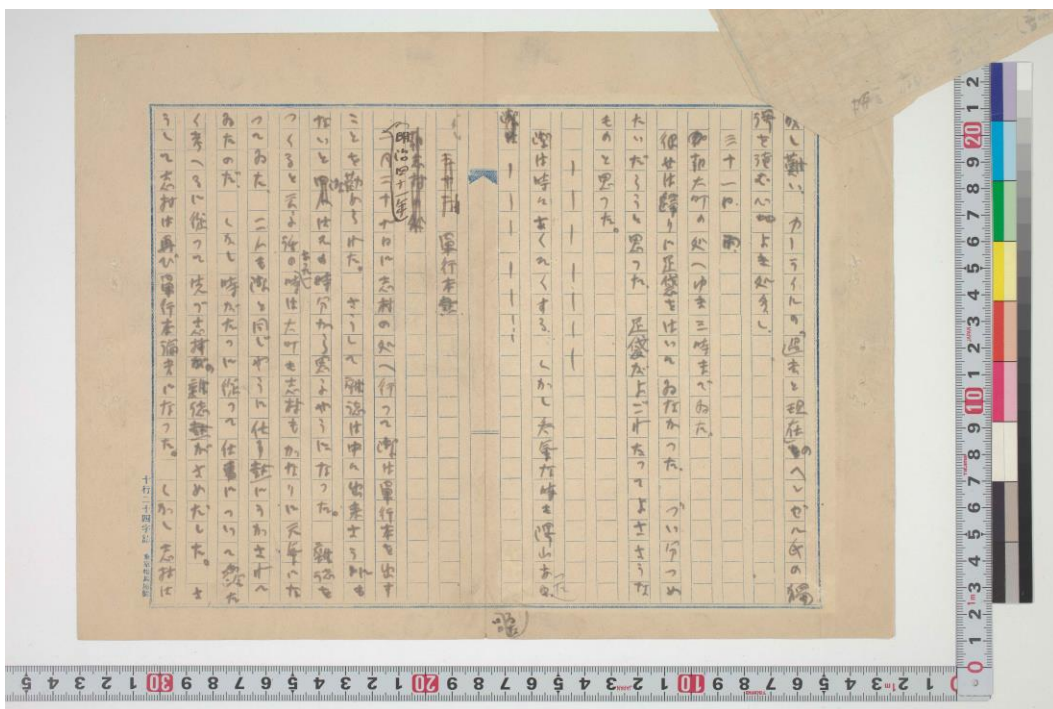
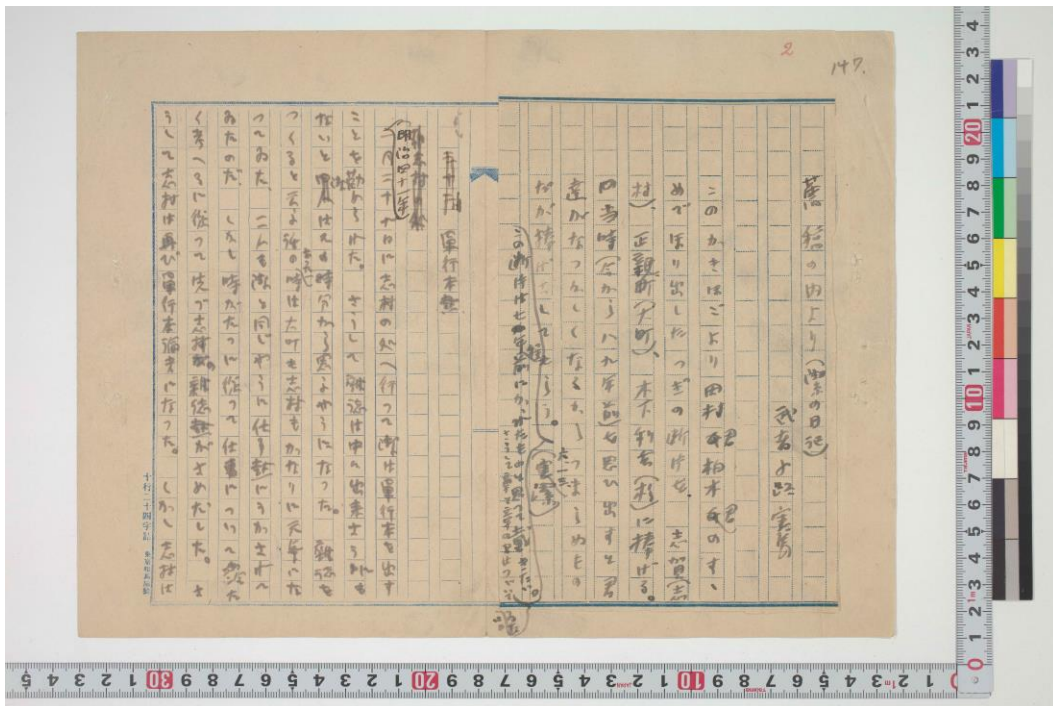


『武者小路実篤全集』18巻(1991、小学館)の作品発表年譜に記載のない作品。冒頭半ページ欠、末尾に執筆年月日(1914.12.18)がある。印刷指示が書き込まれているが、発表誌不明。

(MSMM-0027-00019)



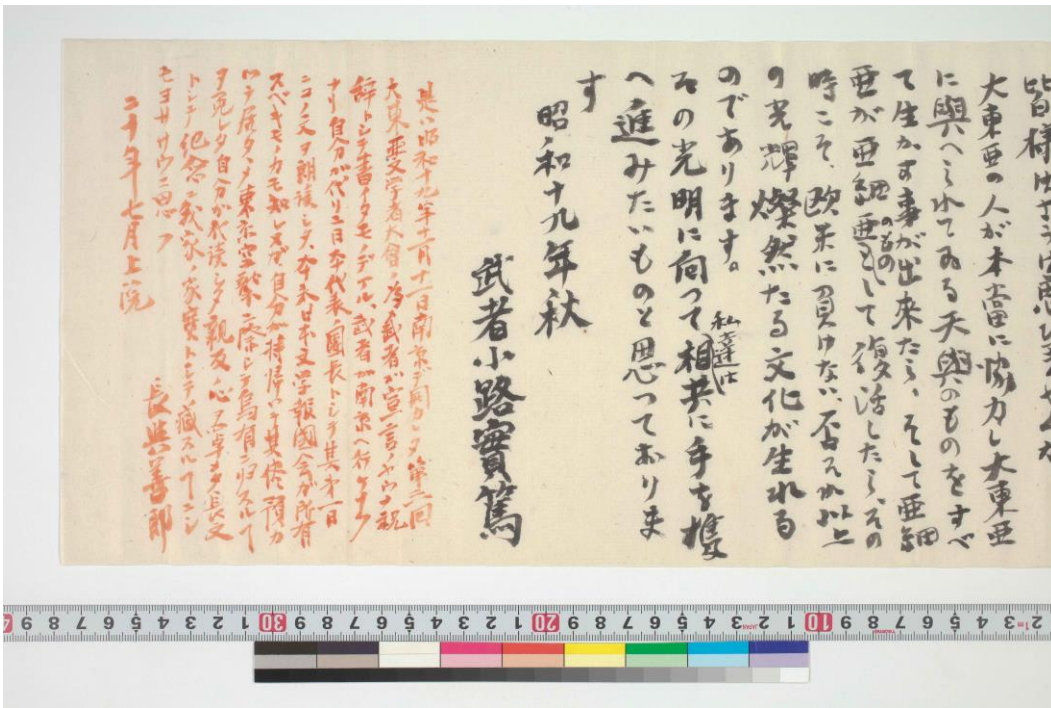
5) 「舊稿の内より（潔の日記）」



明治 41～42 年に書いたものを大正 5 年に編集して作品化したもの。1 枚目右ページは作品化する際に書き足した部分で、古い原稿の右半分を上から貼り込んでいる。

(MSMM-00032-00001、00002)

6) 「南京の大会への言葉」



昭和 19 年 11 月 13 日に南京で開かれた第三回大東亜文学者大会のために執筆。実篤は出席せず、大会では長与善郎が代読した。原稿末尾に長与がその経緯を朱墨で記している。

(MSMM-00035-00010)